

5年ぶりにユニフォームデザインプロジェクト

「かっこいい」をかたちにした



3年間も放っておけば、せっかく続いてきた「誇り・魅力・やりがいプロジェクト」もそれっきりになってしまう。今年度こそは、何とか工夫して立ち上げてみようと思って「ユニフォームデザインプロジェクト」を5年ぶりに再スタートさせた。

振り返ってみれば、3年前の2月25日の「仮囲いデザインコンテスト」の最終審査会は、最終審査まで残った北陸の高校が当日になって参加を見合わせる事になったが、それこそ何とかぎりぎりのところで開催することができた。あの日以降、あつとつ間に新型コロナウイルスの感染が広がり、人を集める

特別寄稿

全国建設業協同組合連合会会長 青柳 剛

企画はどれも中止、屋外作業の建設現場でさえ作業を止めるところまで出てきた。感染症の勢いは、従来型の社会の仕組みを変えするのに十分だった。

建設業の魅力発信の活動は、継続することによって業界を変える「チカラ」となる。「全国から人を集めるプロジェクトはまだまだリスクが伴う。新型コロナウイルス以前にそのまま戻すわけにはいかない。ストレスのかけない進め方はないだろうか」と考えた結果が、「管理できるスケール」で経験したことのあるプロジェクトだった。

もう一度、東京モード学園（東京都新宿区）の学生と一緒に、建設業を考える動きを外に向かって発信することができれば、リスクも少なく効果は大きい。今回のコンセプトには、「デザイン性」と業界の「働き方改革」の2点を盛り込んだ。「ワークライフバランス

を考えてみよう」といったメッセージを込め、「建設業で働く女性のためのユニフォームデザインプロジェクト」をスタートさせた。

2022年7月の説明会を兼ねたキックオフ宣言、同年10月の公開審査会、そして実際にでき上がったユニフォームを披露する入賞作品発表会と、8カ月間にわたってプロジェクトは動いていく。

それぞれの三つの点を結んで広げていくのが広報戦略。節目のポスター発表などを丁寧に発信できれば、効果は倍増する。

今回は案内チラシを含めて手作り4枚作成した。公開審査会に向けたポスターは、群馬県建設業協会青年経営者部会主催の写真コンテストで最優秀となった作品を使い、「女性のチカラで快適職場」をそのままイメージさせる新人の女性技術者のはつらつとした笑顔を前面に押し

出した。もう1枚は、新3K（給与・休暇・希望）に「かっこいい」を加えた「新4K」を念頭に、前回コンテストの最優秀作品を着た女性モデルがドローンを操作する働き方を表現した。

プロジェクトをスタートさせたときは、新型コロナウイルスの感染者数がこれまでで最大になった第7波の始まり頃だった。不安感と背中合わせで進めてきたが、ここにきてようやく「2類から5類へ」と新しい形も見え出し、そっくり元には戻りそうもないが、「誇り・魅力・やりがいプロジェクト」などが、全国各地で広がっていく「きっかけ」にはなりそうだ。

学生モデルをはじめ、学生の演出によるユニフォームの発表会が、いよいよ2月22日に開催される。今回は案内先限定だが、当日の様子をライブ配信で伝える予定にもなっている。ジャンルの違った若い人たちと一緒に、建設業について考えてきた時間は、「デザイン性と働き方改革」を学ぼうとするエネルギーにあふれている。